

シャドーイング練習が学習者の英語プロダクション能力に与える効果

所属校：東京都立板橋高等学校

氏名：佐藤 之美

派遣先：早稲田大学大学院

キーワード：シャドーイング・オーラルプロダクション・ワーキングメモリ・流暢さ・文法正確度

I 研究の目的

本研究の目的は、英語授業におけるシャドーイング練習が学習者の英語プロダクション能力、特に流暢さ (fluency) と文法正確度 (accuracy) にどのような効果をもたらすかを検証することである。

シャドーイングの練習を続けた学習者の方がプロダクション能力、特に文法正確性や流暢さにおいて良い成績を修めるといふ仮説が立証されれば、高校生向けの授業教材開発だけでなく、一般のスピーチ指導、英検二次対策や TOEIC、TOEFL でのスピーキングテストの準備として、シャドーイングを取り入れることが有用であるということが言えるであろう。

II 研究の方法

「シャドーイング練習によって学習者のプロダクション能力は伸びるか。」というリサーチクエスチョンのもと 2 つの検証授業を行い、事前・事後テストにおいて学習者によるスピーチの文法正確性および流暢さを測定し比較分析を行った。

1 検証授業 1 (Study 1)

(1) 4月：事前テスト (Pre-test)

英検 3 級二次試験で使用された絵の描写を 1 分間以上英語で行い録音した。各生徒のスピーチにおける (a) 「文法正確性 (学習者の発話における、すべての節数に対する文法的に正しい節数の割合)」と (b) 「流暢さ (学習者の発話における、1 分間あたりに発話された音節数)」を測定した。2 クラスを選び出し、(a) (b) の数値に差のないことを確認した上で実験群および統制群を形成した。

(2) 4月から7月：検証授業

毎時間英語 I の授業の始めに実験群はシャドーイング、統制群は音読練習を同じ未知の教材を用いて行った。英語の意味内容を理解しながらのシャドーイングであることを示し、練習後は内容に関する質疑応答を行った。

(3) 7月：事後テスト (Post-test)

4 月の事前テストで使用された同じ絵を使用し、実験群・統制群共に同じテストを行った。事前テストと

の結果の違いを t 検定によって統計処理し、比較分析を行った。併せて各生徒がスピーチで発した「文法的に正しい節 (correct clauses)」と「音節 (syllables)」の数も測定し、シャドーイング練習をした後に、どのくらい多く英語を話せるようになったかを調査した。

(4) 7月：事後アンケート

統計分析結果の解釈に役立てるため、リカート尺度 (Likert Scale) を用いたものと自由記述式の 2 通りを用いた。

(5) 分析

事後テストにおいても事前テストと同様に t 検定を行い、文法正確性と流暢さのそれぞれにシャドーイングと音読のグループにおける有意差が生じるかどうかを統計処理し、分析した。

アンケート結果については、意見を分類し質的な研究方法を用いて測定結果の解釈に役立てた。

2 検証授業 2 (Study 2)

2 名の生徒が自主的に 3 日間の夏期講習に参加してシャドーイング練習を行った。検証授業 1 と同じ事前・事後テストを行った。検証授業は毎回 PCLL 教室においてヘッドセットを使用しシャドーイング練習は毎回録音した上で、生徒は自分の録音した声を聞く機会も得た。文法正確性と流暢さを測定し、統計処理は行わず質的に分析した。生徒がスピーチの中で発した「文法的に正しい節数 (correct clauses)」と「総音節数 (syllables)」も併せて測定した。

III 研究の結果

1 検証授業 1 (Study 1)

(1) 事後テストにおいて文法正確性、流暢さは実験群 (シャドーイング・グループ)、統制群 (音読グループ) の間に統計的に有意差が見られなかった (文法正確性: $t = -.405$, $df = 35$, $p = .688$, 流暢さ: $t = .662$, $df = 35$, $p = .512$)。

(2) 統制群 (音読グループ) においてのみ、流暢さについて事前テストと事後テストの間に有意差が見られた ($t = -3.286$, $df = 15$, $p = .005$)。

(3) 両群共に文法的に正しい節の数と、総音節数が事前テストと事後テストの間において、統計的に有為に伸びた。

2 検証授業 2 (Study 2)

2人の平均点を分析した結果、事前・事後テストの間に文法正確性については差が見られなかった (Pre-test: 83.83%, Post-test: 84.03%) が、流暢さについては差が見られた (Pre-test: 34.28, Post-test: 79.12)。文法的に正しい節の数 (Pre-test: 11.25, Post-test: 14.25)、スピーチの総音節数 (Pre-test: 71.0, Post-test: 95.0) についても伸びる傾向が見られた。

IV 考察

1 文法正確性と流暢さ

(1) 文法正確性 (accuracy)

本研究で定義した文法正確性は、2つの検証授業において統計上の伸びは見られなかった。しかしながら、いずれの検証授業においても文法的に正しい節の数と、総音節数が事後テストにおいて統計的に有為に伸びているため、実際にはシャドーイング練習も音読練習も同じ程度生徒が文法的に正しい文を多く言えるようになったと言える。

2つの検証授業では文法や語法について明示的に指導をしなかったため、生徒は教材CDから聞こえる正しい英文と自分の間違った文の違い (gap) に気付かず、訂正できなかったことが考えられる。以下は多くの生徒が間違えた項目である。

- ① 冠詞の誤用 (例: There is a one window.)
- ② 日本語使用 (例: *libingu*)
- ③ 語順の問題 (例: They are singing two girls.)

教師による明示的な指導 (explicit instruction) がなくても、生徒はシャドーイング練習を通じて訂正した例もあったが、特に冠詞や複数形、3人称単数現在形など、定着しにくいと言われる項目についてはシャドーイング練習の前に明示的な指導は必要であろう。

(2) 流暢さ (fluency)

検証授業2では流暢さについて伸びが見られた。これは1分あたりの総音節数の増加の他、スピーチ中で沈黙してしまった時間の減少 (Pre-test: 48.5秒, Post-test: 12.0秒) と、沈黙してしまっただ頻度の減少 (Pre-test: 8.5回, Post-test: 4.0回) が流暢さの数値に反映したものと考えられる。またヘッドセットを使って集中練習ができるPCLLなどの教室環境や、やる気 (motivation) などの条件が整うと流暢さなど

が伸びる可能性があると言える。

2 結果のまとめと考察

(1) 統計的にシャドーイング練習が音読練習よりも学習者のオーラル・プロダクションにおける文法正確性と流暢さの向上に、より効果的であるとは言えない。これは、シャドーイング練習が音読練習よりも学習者の話す能力において、文法正確性、流暢さの向上に効果的であるとは言えない、ということを示唆している。

(2) シャドーイング練習は学習者が発する文法的に正しい節の数、および意味のある総音節数を増やし、より長いスピーチをする助けを考えると考えられる。(1)(2)の結果からシャドーイングは音読よりも文法正確性、流暢さを向上させるとは言えないが、文法的に正しい節の数と音節数の伸び方が統計的に差があるとは言えないことから、シャドーイングも音読と同様に学習者が多く英語を話すようにする効果をもたらす可能性があると考えられる。

(3) シャドーイング練習はやる気の高い生徒がオーラル・プロダクションにおいて流暢さの向上を助けるという可能性がある。これは3日間という短期間でも、やる気がありPCLLで録音して自分で集中して練習できる良い環境であるならば、流暢さは伸びる可能性があることを示唆している。

2 本研究の成果と今後の課題

2つの検証授業から明らかになったことは、シャドーイング練習が学習者により多くの英語を話す助けになるということである。また、授業で練習した簡単な構文を使って1つの絵を2分近く英語で描写できることが、生徒の自信につながったと言える。シャドーイング練習をした生徒の83%の生徒はこの練習をプロダクション能力の向上に役に立つ、または大変役に立つと答えていることから、シャドーイング練習の一定の有用性を述べるができるであろう。

しかしながらどのような教材を、何の目的で、どのようにシャドーイング練習をするかを明確にして導入する必要がある。特にアウトプットを目的としたシャドーイングの場合、教材の難易度や付属CDのスピードを考慮した上で、教材の意味や文法項目、発音 (特に音のくずれ) などは明示的な指導を行った上でシャドーイングを導入することが大切である。

今後シャドーイング練習を授業にどのように取り入れられるか、この研究の成果を今後の授業に役立てると共に、教材開発などを含めさらなる研究を続けていきたいと思う。